

豊太郎が書いたこの文章は、豊太郎の遺書で自殺する。

実は、この文章は、豊太郎の遺書として書かれた物である。これを書いた後、自殺する。

豊太郎は、自分の心の弱さや立身出世に対する強い執着に、また、自分自身の取った行動などに、失望や諦め、絶望を覚えていた。逃れたはずのしがらみから抜け出せていないことにも。

また、豊太郎は、おおくの事に後悔を覚えていたのではないか。その後悔に押しつぶ早急に行うべき重要な課題であった。されそうになったので、どうにかして逃れなくて死ぬことを選んで、自殺する。

よって、この文章は遺書である。

一、時代背景より

明治維新後の日本政府にとって、近代的体制の樹立は、早急に行うべき重要な課題であった。憲法の制定や国家機構の設立などは、その一部である。そのために当時の先進国である西洋諸国に使節団や留学生を派遣した。派遣された人々は、国家から多くの期待を掛けられた人で、のちに戦前の日本の基礎となる部分を作っていく人々となる。東京大学法学部を十九歳の時に首席で卒業した豊太郎もその一人であったと考えられる。

また、明治維新の成功で、それまで支配階級であった士族は、一部を除いてそれまで持っていた特権を失い、多くの士族が没落していった。

しかし、明治維新により自分の能力次第では上の階級へのし上がっていくことが出来るようになった。修養によって身を立てる立身出世は、価値があるとされそれに必要なのは、勤勉・忍耐・新時代の知識や学問である。立身出世は、明治維新やそれに伴う新たな身分秩序や制度の中で没落し苦境に立たされていた士族の子弟にとって夢であったと考えられる。

二、豊太郎の言動より

舞姫の冒頭部分で、豊太郎はこの世の中のつらさ苦しさを知り、人の心はいうまでもなく、自分自身とその心でさえも変わりやすい物であると悟り得た。と述べている。これは、自分がドイツに行ってから日本へ帰ってくるまで、特に免官されてから大臣や相沢と共に日本へ帰国するまでの自分の気持ちの急激な変化から感じていることである。免官された後は、出世を求めないと言いながら、相沢と久しぶりにあった時に、豊太郎が免官された理由を天方伯は知っているの、自分からは豊太郎を推薦することは出来ない。だから、自分のドイツ語の能力を実際に利用して、伯の信用を得るべ

きだ。と言われて、実際に行動に移し、大臣の信用を得て、ロシアへ行って通訳の仕事をしている。また、相沢から豊太郎にエリスは相応しくないので別れるように言われると、相沢の言葉に従って別れる約束をしているが、結局別れない。ロシアからかえって来た時に、エリスへの愛を選んだにも関わらず、天方に誘われた時は、日本へ帰ることを選んでいる。これらが、冒頭の豊太郎の心とは変わりやすい物だという言葉につながっている。そして、自分の心は弱い、実は、多くのしがらみから抜け出して自由を得たように思っていたが、それは自分の思い違いで、自分は、そのしがらみから逃れることは出来ていなかったと言う意味の鳥のたとえ話につながっていると考ええる。

豊太郎は、士族の家に生まれている。時代背景でも述べたが、士族は明治維新によってほとんどが没落していった。豊太郎の家も、父が幼い時に亡くなっているが、子供が東京大学へ行かせられるくらいではあるが、それでも最盛期と比べると没落していたと考えられる。なぜなら、豊太郎が、ドイツ留学を打診された時に、自分の名を上げることや、家名を上げることのならば、今であると考えて、ドイツへ留学しているからである。没落していない士族ならば、新たな制度の中でも、明治維新以前とほぼ変わらない地位を有していると考えられるので、今更自分の名前や家名など上げる必要性は、ほとんどない。つまりは、豊太郎は、立身出世を夢見ていたと考えられる。しかし、それに疑問を持っている時に、エリスと出会い、その後、夢であった立身出世を捨てた。捨てたと豊太郎自身は思っていたが、立身出世に対する思いは実は心の奥底に存在していた。なぜなら、相沢に勧められるままに、天方に自分の能力を見せて、信用を得て、通訳としてロシアへ行っている。ロシアにいる自分のもとへと届いたエリスの手紙を読んで、自分に対する天方の信頼は、以前に比べて、格段に厚く、今の仕事が、未来への望みとしてつながっていることに気づいた時、豊太郎は、冷静ではいられないと述べている。

一度はエリスへの愛を選んでおきながら、天方から日本への帰国を勧められた時に、この人にすがらなければ自分は故郷である日本という国を失い、名誉を挽回する道を断たれ、一生をこのただっ広いヨーロッパの大都市の人波に葬られてしまうのかと思って、日本へ帰ることを選んでいる。これは、豊太郎が、立身出世するという夢を捨てきれずにいたと考えられる。

本文冒頭に、人に言えない悔恨があり、その悔恨が、心の奥底にずっとあり、それは何かにつけて、思い出される物で、ずっと心を苦しめる原因となっている。これは、深く心に刻みつけられた物で、簡単に消し去ることが出来ないとある。これは、豊太郎が自分の選択を後悔しているということである。

三、遺書は誰に当てた物であるか

この遺書は、相沢に当てた物である。

なぜなら、舞姫の中で語られていた話の顛末を豊太郎の次に詳しく知っているであろう人物だからである。ドイツに行ってから免官されるまでは、それほどではないかも

しれないが、その後の話は、相沢が多く援助などをしていたからである。また、豊太郎の心を生来から弱い物であると分かっていたであろう人物であるからだ。豊太郎自身から言ったのか、話から気づいたのかは分からない。弱い心の持ち主であることを知っていたならば、遺書が届いても何故と思うことは少ないだろうと考える。

また、豊太郎の中に相沢ならば、いつか助けてくれたように、どうにかしてくれるだろうという気持ちがあるのではないか。

結論

豊太郎は、自分の心の弱さや立身出世への強い執着に、自分自身に失望し、諦めや絶望を覚えていたのだ。逃れたはずのしがらみに雁字搦めにされていた自分から逃れたい欲だったのではないか。大切であったはずの人を傷つけ、周囲の人を巻き込んでまで叶えなければならない物なのかどうかすら分からないのに。

豊太郎は、多くのことを後悔していた。だからこそ、自分の心の奥底に有るような物まで書いているのではないかと思う。

人に従うことなく生きようと考えても、そういう風に生きることが出来ず、得たはずの自由は、一時的な物で、実は自由などなかった。

自分の心の弱さのせいで、エリスが発狂し、エリスの母は、一人で、病気持ちで身重の娘を看病し、生まれてくる子供の世話までしなければならなくなった。自分自身は、そんな状況の中、逃げるように日本へと帰国する。エリスが発狂する直接に原因は相沢とはいえ、自分が大本の原因であるのにも関わらず。それらの結果として、豊太郎は決して消えることの無い後悔をずっと持つことになった。逃げたくとも逃げることなど出来ない。

それから逃れるためには、死ぬしかないという理由で、自殺する。

よって、この文章は、遺書である。